九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

弥生文化の起源と東アジア金属器文化に関する研究

小林，青樹

https://hdl.handle.net/2324/1654967

出版情報：九州大学，2015，博士（文学），論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

区分	乙

論文題目

弥生文化の起源と東アジア金属器文化に関する研究

氏　名　小林　青樹

弥生文化の起源と東アジア金属器文化に関する研究

本研究は、弥生文化の起源について弥生時代前半期の土器・青銅器・鉄器を題材に、東アジア全体のなかで新しい歴史像の再構築を目指したものであり、以下の４つの課題を設定し分析検討した。

第１の課題は、弥生土器の起源について、北部九州の福岡平野で創成された最初の本格的弥生土器である板付Ⅰ式土器の壺の文様形成に東北地方北部の亀ヶ岡系土器が関与している事実を論じたものである。板付Ⅰ式直前の夜臼Ⅱb 式段階に、福岡平野の雀居遺跡と板付遺跡で出土した特殊壺に施文された亀ヶ岡系の隆線重弧文が、板付Ⅰ式段階にヘラで描き沈線文化して沈線重弧文に変化することを明らかにした。この沈線重弧文は、前期弥生土器の典型的な文様で、その後西日本一帯に伝播した。この段階に北部九州弥生社会では、東北でも稀な亀ヶ岡系の漆塗りの飾り弓や樹皮製容器などの漆塗製品が多数出土しており、これらの精巧な奢多工芸品を積極的に亀ヶ岡系文化から受容し、新しい文化の象徴や社会統合のための威信財とした可能性がある。

第２の課題は、弥生青銅器の起源を遼寧青銅器文化に求め、剣・矛・戈と動物意匠の起源について検討を行ったものである。検討の結果、弥生青銅器の起源は以下の４点に整理された。①銅剣は遼東で出現（遼西の大・小凌河地域まで含める）し、遼寧青銅器文化の基本アイテムとなった。②銅矛は北方草原系でヌルルホ山以北の遼西で出現（その後燕系の影響）し、遼寧青銅器文化全域に広がった。③銅戈は遼西の大・小凌河地域で出現し、燕国系と遼寧青銅器文化の要素が折衷して形成された。④動物意匠の多くは青銅製品が主体で、北方草原系で羊・虎・鹿・鳥を基本要素として東方にいくにしたがい羊・虎が欠如する。弥生青銅器の起源となる遼寧青銅器文化において形成される青銅器は、基本的に北方の遊牧・草原民の青銅器文化（北方青銅器文化）系、あるいは中原の燕国系の影響を段階的に受け、その結果、複数の系列が融合していることが判明した。したがって、韓半島および日本列島の弥生文化は、こうした異なる文化系列が一度、遼寧青銅器文化において受容され、あるいは接合・融合・変容されて形成された文化複合である。

第３の課題は、中国中原の周辺地域である中国外郭圏に位置する弥生文化やベトナム南部青銅器文化といった諸地域の特性を論じたものである。中国外郭圏に位置する諸地域では、銅戈をめぐり柄の長さ・銅戈の装飾化・大形化傾向・銅戈をもつ戦士の鳥装などが共通する。こうした中国外郭圏での共通性は、戈が中原で最初に登場した重要な武器で、かつ殷代から儀礼などで使用されたことに原因があり、その特徴が中原から周辺地域に伝播した結果であると想定できる。こうした共通性に関し、弥生文化については、遼寧式銅戈に燕国系の影響がある以上、燕国を通じ祭祀などが流入した可能性が高い。

第４の課題は、弥生鉄器の起源について、春秋戦国時代の燕国の初期鉄器の東方への拡大を検討し、さらに弥生文化への燕国の影響を検討したものである。燕国の初期の鋳造鉄器は、前６世紀頃には出現し、ほぼ同時に進行した燕国の領域の東方への拡大の過程と合致して生産が増大する。前４世紀頃には遼東から韓半島北部には燕国の初期の鋳造鉄器が拡散しており、日本列島の弥生文化にもこの頃に流入した。弥生文化では、こうした燕国系鉄器は中期前半の約４０遺跡から出土し、吉野ヶ里遺跡では中期後半の出土量を凌駕する。また、中期前半に突如出現する方形柄穴をもつ木製農具の出現も燕国系鉄製農具の影響の可能性が高く、燕国は予想以上に弥生文化に影響を与えた。この段階の燕国の影響は、中国外郭圏である弥生文化への中原系文化の伝播を示すが、ほぼ同時に北方系青銅器文化や遼寧青銅器文化が流入する契機ともなった。

以上の４つの課題から、初期弥生文化の形成期である弥生時代前半期における文化変動は、前期前半期において日本列島内部での東北北部亀ヶ岡系文化文化のダイナミックな交流と社会変容があり、続いて前期後半から中期前半段階に北方遊牧民系や燕国系の文化体系が日本列島に流入して接合・融合・変容を経て、主に北部九州弥生社会を舞台に展開したことが明らかとなった。こうしたダイナミックな交流による社会変革がその後、後半期に続く弥生文化の基盤となったと考える。